

「広い大地を渡る風となつて

私達を見守つていて下さい」



普段は眠そうに目をこすりながら起床していた夫も、川釣りに出かける休みの日だけは別でした。遠くの釣り場へ向かうときは、早いときだと夜も明けきらぬうちに家を出ていたものです。

気持ちや表情にすぐ現れる人でしたから、帰宅したときの顔を見れば、その日の結果は話を聞かなくても何となく分かりました。満面の笑みだと

『今日は沢山釣れたみたい』、少し機嫌悪そうな様子だと『今日はイマイチだったのね』。クーラー

ボックスが一杯になるくらいヤマメが釣れた時に満足げな表情を浮かべて帰宅した姿が、今も

忘れられません。元気であれば、もう少し楽しめる趣味だったのですが、病に倒れてからは以前の

ように川へ行くどころか、入院生活を余儀なくされ本当につらかったことでしょう。見送る現実

に悲しみはひとしお募りますが、つらい病から解放されて休んでもらえるよう願っております。

夫博全太郎は、平成〇〇年〇月〇〇日、七十三歳の生涯をとじました。

共に歩み夫を支えて下さった皆様へ、心より感謝

申し上げます。本日はご多用の中、ご会葬を

頂き誠に有難うございました。略儀ながら書状をもつてお礼申し上げます。

平成〇〇年 〇月〇日(通夜)

〇月〇日(告別式)

千葉市〇〇区〇〇町〇丁目〇〇

喪主 博全花子

外 親戚一同



尚本日は何かと混雑に取り紛れ不行き届きの段あしからず
ご容赦下さいますようお願い申し上げます